

## 《寄稿》 「めいがくのすきま展」報告

昨年度に引き続き今年度もまた「めいがくのすきま展」と銘打ち、6月7日(月)～11日(金)に明治学院大学・白金校舎ボランティアセンターの空間を使ってこまどり社・作品展をおこないました。

前回は2ヶ月半という長い期間を使った展示でありまして、その期間中に制作された作品(時には会場内にて公開制作)を不定期的に配置していくやり方でしたが、今回の展示はこまどり社が3月下旬～4月上旬にかけて大阪・釜ヶ崎に滞在し制作した作品の巡回展の一環でもありまして、その際に制作した風景画59枚を中心とした展示で、5日間と短期間の開催でした。

それら絵のひとつひとつはそんなに大きくなくとも枚数が多く、それらを展示先の空間(このたび巡回した各所空間はどこもギャラリー的構造ではない生活空間)にどう配置していくかがこの巡回展のテーマの1つであり、展示に使う空間の構造によって方法を変えつつやってきました。

昨年の「すきま展」では日常空間の隙間に混ぜ込むやりかたで、あえてそこに作品がある(それが作品であるのか)とは気づきにくいような配置を試みた展示だったのですが、今回は逆に全部の絵を1箇所集約させたオブジェ的立体を段ボールを土台に作り、それを空間内の壁に立て掛ける一目瞭然な展示法になりました。

59枚の風景画は滞在中に釜ヶ崎の町のなかの至る風景をマジックペンで1枚につき約10分程度で描いた簡素なもので、描こうと思ったきっかけとしては釜ヶ崎滞在期間中に会った人たち約20人ぐらいに私の似顔絵を描いてもらった折に、それら似顔絵がどれとして見事に他の絵と同じ顔のように描かれてはいないが、すべてが私の似顔絵以外の何物でもなく見えた辺り、いわば「同じものを見ていても人によって目に映る風景は同じではないはず」と思いしところに端を発してであり、自分がこの土地と直接向き合うのなら、やはり自分の主要表現法である絵を描く行為を媒介としたいという思いもあつての行為でした。

そしてそれが「自分の意識や感情のフィルターを通した上で映る風景」に忠実に描写する行為というある種捏造的な要素も内包する風景画を描くことで、既に定義されたものとしてあるかの様々な前提をいちど自身の感覚にて再検討する思考。それは本来は多様なはずだがイメージが固定されがちなボランティア行為の前提を洗いなおすことと結び付けられないか、と言えば強引な妄言かもしれませんが…。

個人の生活者としての感覚の直接的行為、それ自体がアートになりうる可能性を含むという提案は昨年の報告でも書かせてもらいましたが、展示でも自分の制作のスムーズにはいかない、あえて荒削りな部分を意図的に晒すことで、その辺りを空間に足を運ぶ方々に感じ取ってもらいたいとも目論みました。

とはいえ今回はすでに内容の決められた作品の巡回展の一環でありましたが故、ボランティアセンターという場所でやる意義と密接な意図を含んだ展示とまではいかず、ヒトと人との関わりの中から作品が創り出される感覚をあまり含み切れなかった心残りがあります。もしまた機会があれば、その辺りをテーマに据えた展示なりワークショップ的な試みをやれたらと思っております。(こまどり社・仮屋崎)